

談話

第一週

夏休み中のいろいろの話

長い間遇はなかつたお友達、お室、それから庭や砂場や、それが数へれば六十日といふ相当の日数が経つてゐる。四五日休んで出て来た時は全く違ひ、先生に對しても、友達同士にでも、一寸あらたな氣持ちになるらしい。規則的な日々の通園といふこと、しばし遠のいてゐたので、この幼い年齢では、始めの一日二日はまだお母さんや兄弟との生活の方になづんでゐて、あの六月の終り七月の始めころの幼稚園生活は一寸違つた氣分が見える。中にはぐつミ後戻りして、新入の始めにかへつて、附添を離れなかつたり、一寸した事に泣いて見たり、ミいふ事もあらう、まだ許されていゝ時である。座席、靴箱、帽子掛けの位置なごもまごつく事もあらうし、この點よく心得ておき、一人々々の子をもごのすみなれた保育室へやさしく迎へるのが第一。

次には、お休み中の健康状態、大體如何してゐるか、出なければ何處へ行つてゐるか、位は知つて置くべきで、それにはこの長いお休み中、みんなミハガキ程度の往復位はある筈。黙つてゐても多くは便りをよこすものであるが、たまには一人二人何の消息の無い時もある。お休みの中ば過ぎて何のたよりも無い時は一寸、ハガキでかるく尋ねてもいゝと思ふ。お休み中は母の手許にあるので、安心には云ひながら、同じ組の先生となり、子供になつたミいふ關係は、奇しき縁も云ふべく、やつぱり氣になる、さうしてゐるかを知つて置きたい。

斯うして一人づゝの生活状態をよく知つておいて、第二期の保育を始める。

さて夏休み中のいろいろの話は、さういふ形式でミいふわけもない。久し振りに顔を合せたる故、お互ひに話さずには居られないであらう。まづ眞黒に日に焦けた健康そ

な顔に遇へば、まあ、お丈夫そうにおなりですね、随分脊が高くなつてなき、いふ驚きは、それに對するお母さんの挨拶、毎日々々よく水につかりましてさか、先生におつしやつて頂いたので、お休み中は陽にあたるのをお仕事にしてゐました、おかげ様ですつかり丈夫になりました、なき、いふ報告で、まづ始業式から話が始る。

翌日の朝、例の通り久しぶりで先生のまはりに腰かけて。こゝで、先生はみんなの様子をきく前に、自分の話もして聞かせる。先生も海へなり山へなり、單なる一日二日の旅行でも出かければいろ／＼話もあらう、がどこにも出かけないにしても、六十日の間には、何か話して聞かせる事はあらう。何でもない事でもい。

先生の話の聞いてゐる間に、子供もそれ／＼自分達の生活の思ひ出す。そして、話したくてたまらなくなり、やたらに話し出してくる。

そこで、一人づゝ次々名指しで話させる。こんなこゝは一日ではすまないの、二三日、或は一週間も、しばらくかかる事もあらう。

又採集して來た蝶々を持つて來るものもあれば、海岸で拾つた貝のいろ／＼を箱に入れてくるもの、珍らしい魚のアルコール漬けなき持つて來るものもあつたりして、この展覽は自分の室だけでは無く、方々のを見せて貰ひに行くのもよろしからう。

鳴かない鈴蟲

荒く萌え出た夏草の茂みには、こほろぎ、ばったなき子供を喜ばせる蟲が澤山になつた。そこで蟲に關聯したこのお話を選ぶ。こほろぎ、ばった等の方が手近にある蟲はいへ、やはり、話の題として扱ふのは鈴蟲か松蟲の方であらう。

この話は靜かに讀んで聽かせる。二度位。

愛するの餘り、蟲の方では随分迷惑もしてゐるであらうから、その邊の心づかひをこの話にふくませて。

三羽のひよこ。

強慾な狼が、その行爲の報いで、お腹に三つのふくらみ

が出来ると、そのふくらみが活躍するのはとても子供が喜ぶので、是迄に幾回も用ひたこじがある。

第二週

お彼岸について

この程度に話すべきか、こは一寸考へさせられる。幼児の日々の生活は餘りに縁の無いこじで、こ思へばそれきりであるが、さればこそ、尙更斯ういふ時に佛事の話をし て置きたい氣がある。

この家でも新佛については、なるべく子供にはかゝはり無くこの心づかひをするものであるが、朝毎の禮拜とか、祖先へ或は祖父母への墓參、又到來物の珍らしいものなきは、まづ佛前に供へてからなき、いふこは、心ある家庭の親達はまづ自らこれを行ひ、又子供にさせてゐる家々があるものである。斯ういふ家庭で育てられてゐる子は知らず識らず敬虔な氣持を養はれてゆくのでは無いかこ思はれる。

さて、彼岸であるが、その委しい話は別として、この七日間は特に佛様を大切に思つて、新しい花にきりかへ

る、御馳走を供へる、墓參に行く等の話をすれば、さうしてゐる家の子は、自分の家の事を話すであらうし、又はおすもじが出来ると、お萩が出来たなきこいふ楽しみもあつて幼い時はそんな事からお彼岸を強く印象する事もある。

嵐について

この頃はよく荒い嵐が吹く。一年の中で、さういふ時期であるこを知らせると共に、晴天の日、曇り、雨、風等の他の日はつきりしてくるわけ。嵐そのものよりも先生の経験した嵐の日の事實ばなし、例へば、ひざい嵐のあとで電車が通らなくなつた、お庭や通りの木がみんな根こそぎ倒れた、塀が壊れた等、ありのまゝを話す。幼い時年寄から大地震の時の様子を度々聞かされて、あゝ又かこ思ふ程聞かされてゐた、それがあの大震災の時、あまり現實にそれを経験して、老人の注意や、警戒してくれた事等が、やくに立つたこもある。そんなこを思へば、多くの事が、機會ある毎にそれについての話をしておくべきであるこつくづく思はれる。